

The American Senator 試論

— A ‘Condition-of-England’ Novel として —

A Reading of *The American Senator*: A ‘Condition-of-England’ Novel

香山 はるの

要 旨

この論文は Anthony Trollope の後期の作品 *The American Senator* を ‘condition-of-England’ novel として読む試みである。

アメリカからイギリス見聞にやってきた Elias Gotobed (以下 Senator) は、好奇心旺盛で見るもの聞くもの全てについて、愚直なまでに正直なコメントをし、しばしば周りの者を苛立たせる。その様子は読者の笑いを誘うが、小説中の彼の役割はそういった喜劇的なものととどまらない。たとえば Senator は、国教会や陸軍、選挙区等、イギリスの諸制度に潜む不平等や矛盾を指摘するが、実際彼の見方は問題の核心をつくものが多い。また、彼はイギリス社会の腐敗を階級の問題と結びつけ、貴族の金権支配や上流階級に蔓延るマテリアリズムなどを、痛烈に批判する。Trollope は究極的には、Senator の示唆するようなイギリスの社会構造の変革までは考えていないようだが、その内部にある（上に言及したような）様々な問題についてはしばしば、このキャラクターの声を借りて自分の見解を主張している。この小説が出版された当時は Senator の辛辣なイギリス批判に反感を抱く批評家も多く、評判は概して芳しくなかった。しかし、この小説を今後のイギリスのあるべき姿を探った ‘condition-of-England’ novel として捉えると、Senator こそがその要となる人物であることがわかる。Senator は外国人訪問者という立場から、イギリスの「常識」を外から眺め、(イギリス人自身が気づかない、或いは認めたくない) その非合理性を暴いてみせる。小説の後半、Senator の講演は中断され、彼は再び ‘New World’ に戻るが、彼の残したメッセージは、ヒロイン Mary Masters の幸せな結婚といったコンヴェンショナルなエンディングに完全にかき消されることなく、その余韻を残している。*The American Senator* には、それまでアメリカをはじめ、様々な国を旅してきた Trollope が体得した2つの視点——内なる母国と外から眺めたイギリス——が興味深く交錯し、深いアイロニーを生み出しているのである。

Anthony Trollope (1815-82) とアメリカの関係は深い。Trollope は1859年、1861-62年、1868年、1872年、そして1875年と5回に渡りアメリカを訪れている。最初の訪問について Trollope は *The West Indies and the Spanish Main* (1859) の中で詳述しているが、また彼はこの旅行を機として、‘The Courtship of Susan Bell’ (1860) や ‘Miss Ophelia Gledd’ (1863) など、アメリカを舞台とした短篇を執筆した。2度めの訪問は南北戦争の最中になされ、この時の観察は *North America* (1861-63) に結実した。Trollope は専ら北部寄りの姿勢をとり、南部については殆ど共感を示さなかったが、その点を除けば、この旅行記には概してアメリカの社会や文化を公正に、好意的に描こうとした彼の姿勢が表れていると言ってよいだろう。⁽¹⁾本稿で取り上げる *The American Senator* (1876-77) は、Trollope のオーストラリア、並びに5回目のアメリカ滞在期間中に書かれたものである。そこにはアメリカ、アメリカ人に対する Trollope の洞察の深まり、そして「外から見た母国」という視点が興味深く反映されているのである。

Trollope の小説には数多くのアメリカ人が登場するが、それぞれのキャラクターの性格も多様である。上記の ‘Miss Ophelia Gledd’ のような短篇では、アメリカ人——とりわけ「ボストン—の美女」とされるヒロイン——の快活さが、大きな魅力となっている。しかし、60年代半ば以降に書かれた多くの長編小説は、Trollope のアメリカ観が微妙に変化し複雑になってきたことを示している (Mullen, 6-7)。たとえば、1868-69年に書かれた *He Knew He Was Right* に現れるアメリカの女性詩人 Wallachia Petrie のキャラクターには、ラディカルなフェミニストに対する Trollope の激しい嫌悪が感じられる。また、1874-75年の風刺小説 *The Way We Live Now* には Hamilton K Fisker や Winnifred Hurtle ら、脂ぎった企業家や「墜ちた女」といったいかがわしいアメリカ人の姿が強烈に描かれている。しかし、こういったイギリスの社会的、道徳的秩序を攪乱するアメリカン・キャラクターがいる一方で、*The Duke's Children* (1879-80) の Isabel Boncassen のように Silverbridge 卿と結ばれ、イギリス貴族社会に新風を吹き込み、古い伝統的な価値を活性化する新世界出身の「シンデレラ」も生み出されたのである。そして、これから論じていく *The American Senator* に関して言えば、Mikewa からイギリス社会の観察にやって来た Elias Gotobed (以下 Senator と記す) は、真面目で正直、そして(彼の名前が暗示するように) やや滑稽な人物であるが、彼が小説の中で果たす役割は根本的に、上に言及したいずれのキャラクターの役割とも異なる。一言で言えば、それはこの作品がイギリスという国家の進むべき道を探る、いわゆる ‘condition-of-England’ novel (Halperin, ix) であることと大いに関係があろう。以下、Senator が示す様々なイギリス批判を中心に取り上げ、当時のイギリスの社会状況と照らし合わせながら、それが投げ掛ける問題について考えていきたい。

Senator はワシントンで知り合ったイギリス人の公使館員 John Morton の屋敷に、Morton

の婚約者 Arabella Trefoil とその母親、Lady Augustus と共に招かれ、滞在する。イギリスの生活や慣習、政治のありかたについて可能な限り多くの知識を吸収したいと願う Senator はあらゆる事柄に口を挟み、疑問を問いただし、率直なコメントをするが、そういった態度は周囲の目にはしばしば「不躰・非礼」と映る。たとえば、8章で Bragton に到着した時、Senator は屋敷をじろじろと眺めた末にその館の主人である Morton に向かって “Quite a pile… Damp, I should say?” (51-52) などと言い、その上使用人の数まで聞き出そうとする。また、キツネ狩りを初めて見学したときも、狩りに興じる一団の傍らで、時間とお金を費やすこのイギリスの「インスティテューション」の無意味さを主張する。その結果、皆から「イギリスのジェントルマンの世界を理解できない、お節介な外国人」と見做されるが、実際キツネ狩りに関して言えば、小説家自身 Senator の見方に同意しているとは考え難い。第一に、Trollope の狩り好きは有名である。彼の死後に出版された『自伝』(An Autobiography) では、キツネ狩りをめぐる数々の楽しい思い出が鮮やかに語られている。また、Trollope の小説においてもキツネ狩りのシーンは頻繁に出てくる。Castle Richmond (1860) における次の一節は、まさに Trollope 自身の言葉として多くの読者の心に刻まれているのではないか。“A man in a hunting county who opposes the county hunt must be a misanthrope… There are such men, but they are regarded as lepers by those around them” (279).

しかし、こういった「嫌われ者の無知なアウトサイダー」のイメージが、Senator に対する Trollope の最終的見解とは思われない。まず、Ruth apRoberts が指摘するように、ストーリーが進むにつれ、当初強調された Senator の「グロテスクなヤンキー」というステレオタイプのキャラクターは変化を遂げ、より人間的なものになっていく (174)。たとえば小説の後半で読者は時折、断定的な発言とは裏腹に、自分の取った行動を振り返りその妥当性を自問する孤独な Senator の内面を垣間見る。言うまでもなくこれは彼の公正さ、謙虚さを示唆するものであろう。また77章で語り手が、St. James's Hall における Senator の講演（‘The Irrationality of Englishmen’）は、名声を求める気持ちからなされたものではないと、あらかじめ読者に断わっているのも注目に値する。むしろ、Senator の発言の根本にあるものは、愚直なまでに純粹な自己表現の欲求である。そして一層重要なことに、その発言の内容——すなわち Senator のイギリスの諸問題についての評価や批判——は、しばしば鋭く核心を衝いていると考えられるのである。

たとえば、イギリス国教会の聖職者に関わる問題を取り上げてみよう。42章で Senator が教区司祭 (rector) の Mainwaring の前で、聖職者の任命や俸給における不平等や矛盾を話題にする場面は痛快である。なぜなら (Senator はこの時点では知らなかったのだが) 実際 Mainwaring の聖職禄は妻の金で買ったものであり、また彼は高収入を得ているにもかかわらず、教会の仕事の大半を薄給の牧師補 (curate)、Surtees に押しつけていたからである。この

エピソードは一見、Senator の無遠慮さ、或いは人付き合いにおける不器用さを示す一例に過ぎないようにも思われる。しかし、一方で Trollope は、高価なワインなど贅沢に耽る Mainwaring の安逸な生活をほのめかし、Senator の主張が反駁できないものであることを巧みに示唆しているのである。19世紀のイギリスで聖職禄売買が広く行なわれていたことは Owen Chadwick の *The Victorian Church* に詳しい (207-214)。また、Trollope が聖職給の不平等に強い関心を抱いていたことはよく知られている。1865-66年に書かれた *Clergymen of the Church of England* の中で、彼は年収千ポンドの教区司祭 (rector) に年70ポンドで雇われ、その仕事の4分の3以上を代行しなければならない牧師補 (curate) の窮状を訴えている (96-97)。さらに Trollope は、人々がこういった “Old English corruption” (8) に慣れすぎてしまい、その不正を問い直す必要すら認識していない点を鋭く指摘しているのである (97)。この意味で、Mainwaring を困惑させた Senator は、作者 Trollope の代弁者であったとさえ言えよう (Durey, 55)。

また、Senator がイギリス社会の腐敗を階級間における貧富の差と結びつけ、貴族による金権支配の横行や特権階級の墮落を攻撃している点も、あながち的外れの議論とは思われない。たとえば、Senator はロンドンの講演で独占選挙区 (pocket borough) の問題を取り上げているが、1832年の第一次選挙法改正後もこの種の選挙区は根絶には至らず、19世紀後半まで特定の実力者による議員指名が依然として見られたという (Thompson, 200-207)。また、Senator が批判する陸軍士官の位階購買制についても、資力の有無によって人を差別する「非人間的な」制度という反発が高まり、(この小説の舞台である) 70年代までには、着実に廃止の方向に向かっていたという事実がある (村岡 193)。こうした点において、Senator は当時のイギリス社会における問題を的確に把握していたと考えられるのである。

さらに、Senator も関与する Dun Goarly と Rufford 卿の争いは、階級の問題を正義やモラルという面からあらためて問い直す糸口になっているように思われる。この件に関して言えば、貧しい労働者階級にも、富裕な大地主に対して損害賠償を請求する権利があるという Senator の見解は、理論的に正しい。そして、Senator はあばら家を背にして草刈り場で汗を流す Goarly と、狩猟やパーティに日々明け暮れる Rufford 卿の姿を対比させ、上流階級に浸透している空虚なマテリアリズムを批判する。すなわち、Rufford 卿の属するような貴族社会には、勤勉や向上心といった価値観は存在せず、金銭や社会的地位がもたらすものが全てであるという。Senator はアメリカの友人に宛てた手紙 (51章) の中で、いみじくも言っている。“And industry, — in such houses as I now speak of, — is a crime” (355)。

それでは、こういった Senator の見解に対して、Trollope 自身はどのような立場を取っているのか。 *The American Senator* では、Trollope は上に言及したような選挙や陸軍に関する法や制度について、明確な姿勢は示していない。むしろ、彼はイギリス上流社会に蔓延するマテリ

アリズムという問題に焦点を当て、Rufford 卿の結婚をめぐるエピソードを描いて、これを追求している。

Rufford 卿のような大金持ちの若い独身男性の周りに、財産目当ての花嫁志願者が群がるのは、想像に難くない。この小説のアンチ・ヒロイン、Arabella Trefoil もまさにそういった打算的なハズバンド・ハンターの一人である。⁽²⁾ Arabella が、美貌、ウィットに富んだ甘言、涙などあらゆる手段を講じて、Rufford 卿を捕まえようとする様子は特に小説の前半で、風刺的に描かれている。たとえば、Arabella は、Rufford 卿宛ての手紙の中で多くの嘘を並べ立てるが (31章)、これに対する語り手のコメントは辛辣である。“But then such ladies as Miss Trefoil can never afford to tell the truth” (212)。ここには、この「女策略家」に対する Trollope 自身の批判が認められよう。

しかし、一方で Trollope が、Arabella のヴァイタリティーを、ある種感嘆の目で見ていることも、また事実のように思われるのである。実際、周囲の反対や妨害を物ともせず、自分の計略を推し進めていく Arabella には、Rufford 卿には見られない気概すら感じられる。特に Arabella が Rufford 卿に小切手を突き返し、負け戦を覚悟で敵陣 (Rufford Hall) に乗り込んでいく場面は圧巻である。1877年、Trollope は、知人への手紙の中で Arabella のキャラクターについて、皮肉なユーモアを交えながらも次のように書いている。

I have been, and still am very much afraid of Arabella Trefoil. The critics ... will tell me that she is unwomanly, unnatural, turgid, — the creation of a morbid imagination, striving after effect by laboured abominations. But I swear I have known the woman, — not one special woman... but all the traits, all the cleverness, all the patience, all the courage, all the self-abnegation, — and all the failure... Will such a one as Arabella Trefoil be damned, and if so why? Think of her virtues; how she works, how true she is to her vocation, how little there is of self indulgence, or of idleness. I think that she will go to a kind of third class heaven in which she will always be getting third class husbands. (*Letters II*, 710-711)

また、Arabella の置かれた境遇を考えると、彼女の“vocation” (“husband-hunting”) も複雑な意味を帯びてくる。持参金は持たないが、公爵 (duke) の姪というプライドから安易に妥協できず、財産と社会的地位を備えた夫を見つけなければならない——こうした Arabella のようなケースは、当時決して珍しいものではなかったろう。apRoberts の表現を借りれば、こういった女性たちは、いわば階級社会の「文化的現象」或いは「システムの産物」である (185)。

しかも、Arabella の場合、さらに同情すべき余地がある。第一に、無責任で浪費家の父親と、卑俗で貪欲な母親は、全く頼りにできないという事情がある。そのため、Arabella は独力で世間を渡っていかなければならない。加えて、Arabella にはもはや“husband-hunting”の強力な武器となる若さもない。13章では、John Morton に見切りをつけ、さらなる「夫探し」を促す母親に向って、Arabella は痛ましい叫び声を挙げる。“I can't stand this any longer... Talk of work, — men's work! What man ever has to work as I do?”そして、これに続く語り手のコメントは読者の共感を誘う。“I wonder which was the hardest part of the work, the hairdressing and painting and companionship of the lady's maid, or the continual smiling upon unmarried men to whom she had nothing to say and for whom she did not in the least care!”(85)しかし皮肉なことに、この小説中、Arabella を時折襲う“cold melancholy”(470)の意味に気付いていたのは、彼女とさほど親しくないアメリカ人の Senator だけであった。彼が Rufford Hall で昼食を取りながらふと洩らす言葉は、痛切である。“I fancy that here in England a young lady without a dowry cannot easily replace a lover. I suppose, too, Miss Trefoil is not quite in her first youth”(470)。しかし、Rufford 卿の姉 Lady Penwether やその友人で後に Lady Rufford となる資産家の娘 Miss Penge など、いわゆる特権階級の内側に安住する者はこのような見方に関心を示さず、風変わりなアメリカ人の戯言として無視を決め込む。彼女達の世界では、人間関係は主に金銭のつながりで成り立っており、結婚もその例外ではない。財産のない Arabella は所詮、危険分子として締め出されなければならないのだ。

Trollope は最終的には Arabella を悲劇のヒロインにする意図はなかった。これは、実際彼女が Mounser Green という(Trollope の言うような)“a third class husband”を得て、パタゴニアへ旅立っていくという結末からも明らかである。しかし、これまで見てきたように、Trollope は Rufford 卿をめぐる展開する Arabella の苦闘やその敗北を描くことで、「マモン崇拜」という上流社会を蝕む病を改めて探ろうとした。そしてアウトサイダーである Senator はその閉ざされた世界における常識の歪みを、いわば「外側」から見る視点を提供してくれるのである。

Senator のロンドン講演が中断されたことは、イギリスの伝統を愛し遵守する保守主義の地盤の堅固さを物語るものである。そして Trollope も、イギリスの社会構造そのものの変革までは示唆していない。たとえば、Senator 自身認めざるを得ないように、この小説の中では、上流階級の者が下層階級の者より人間的に優れ、信頼できるというケースも少なからず見られる。さらにエンディングにおける、ヒロイン Mary Masters と Reginald Morton との結婚は、紳士階級の存続、繁栄を暗示していると考えられる(Kincaid, 239)。特に、Marry が Larry Twentyman に対し一種の階級差のようなものを感じて、彼の求婚を拒み、結局 Bragton の地

主 (squire) Reginald を夫に選ぶのは興味深い。Marry は Arabella と違い、特に Reginald の身分や財産に引かれたわけではない。しかし、Lady Ushant のもとで幼少期を過ごした Mary は、Reginald が身につけている紳士階級の価値観や習慣に、自ずと共感するものを見出したのである。

The American Senator の結末に見られるこのような保守的な色合いは、たとえば、同時代に書かれた、George Eliot (1819–80) の ‘condition-of-England’ novel、*Felix Holt, the Radical* (1866) が提示するヴィジョンとはおよそ隔たっている。たとえば、Eliot のヒロイン Esther Lyon は「内的革命」(“an inward revolution”, 388) を経て、長年夢見てきた上流階級の生活を敢えて捨て、貧しい Felix Holt との結婚に踏み切る。これに対し、Trollope のこの小説では、価値観の転覆を引き起こすような道徳的覚醒は、いずれのキャラクターにも認められない。また、Felix / Eliot が主張する(選挙法の改正に伴う)「大衆の教化」の必要性は、Senator そして Trollope の視野には入っていなかったように思われる。こういった意味で、*Felix Holt* は *The American Senator* よりもはるかにラディカルで且つ政治的な作品といえる。

一方、これまで見てきたように、Trollope はイギリスの階級構造の基本的な枠組みそのものは崩さず、その内部に潜む問題に読者の目を向けさせ、意識面における漸進的な変化を促したと考えられる。この小説が出版当時、Senator という「あつかましいアメリカ人」キャラクターと彼が曝け出す「全くの不法」(Smalley, 473) のために、批評家の不興を買ったことはよく知られている。しかし Trollope が出版者 George Bentley の要請にも拘らず、*The American Senator* というタイトルの変更を拒んだことから推察できるように、⁽³⁾作者の意図に従えば Senatorこそ、この小説の要となる人物なのである。Trollope は1876年12月 Mary Holmes に宛てた手紙の中で、次のようにコメントしている。“...he [the Senator] is a thoroughly honest man wishing to do good, and is not himself half so absurd as the things which he criticises” (*Letters II*, 701). Senator は外国人訪問者というある意味で自由な立場から、教会や陸軍などイギリスの諸制度における矛盾や不平等を暴き、その根本にある近視眼的で “absurd” な発想を鋭く指摘する。そして現在、未来におけるイギリスのあるべき姿を読者に考えさせるのである。小説の終わりで Senator は “old country” を去り、祖国アメリカに舞い戻る。しかし、Senator が残していったメッセージ、或いは彼が引き起こした波紋は、Mary と Reginald の結婚というコンヴェンショナルなハッピーエンディングによっても、拭い去ることはできない。

Trollope は一般に、イギリスの伝統的価値の擁護者 (Praz, 290–92) と受けとめられているが、*The Way We Live Now*、*The Prime Minister*、そしてこの *The American Senator* など、特に70年代後半にはイギリス社会を風刺する長編小説を数多く生み出した。そうした作品の

世界では、Trollope がそれまでアメリカやオーストラリア、ニュージーランドなど様々な国を旅して得た視点——すなわち、「内」から見る祖国と「外」から眺めたイギリスという2つの異なるイメージ——が微妙に交錯し、深いアイロニーを生み出しているのである。

注

- (1) Trollope は、母親 Frances Trollope (1780–1863) の *Domestic Manners of the Americans* (1832) における辛辣なアメリカ批判が、アメリカ人の感情をひどく損ねたことを配慮し、全く異なる性質の本を書いてその怒りを和らげようと考えたようである。 *North America*, 19–20.
- (2) Trollope が *Arabella* のハズバンド・ハンティングを、キツネ狩り (fox hunting) になぞらえているのは興味深い。
- (3) Bentley は、*The American Senator* というタイトルはイギリスを舞台にしたこの小説にそぐわず、むしろ読者を惑わせるのではないかと危惧していた。 *Letters II*, 701.

引用文献

- apRoberts, Ruth. *Trollope: Artist and Moralist*. London: Chatto & Windus, 1971.
- Chadwick, Owen. *The Victorian Church*. London: Adam & Charles Black, 1970–1972.
- Durey, Felicity Jill. *Trollope and the Church of England*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2002.
- Eliot, George. *Felix Holt, the Radical*. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Halperin, John. Introduction. *The American Senator*. By Anthony Trollope. Oxford: Oxford UP, 1986. vii–xvi.
- Kincaid, James. *The Novel of Anthony Trollope*. Oxford: Clarendon Press, 1977.
- Mullen, Richard, and James Munson. *The Penguin Companion to Trollope*. London: Penguin, 1996.
- 村岡健次『近代イギリスの社会と文化』 ミネルヴァ書房、2002.
- Praz, Mario. *The Hero in Eclipse in Victorian Fiction*. Trans. Angus Davidson. London: Oxford UP, 1956.
- Smalley, Donald, ed. *Anthony Trollope: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1969.
- Thompson, F. M. L. *English Landed Society in the Nineteenth Century*. London: Routledge & Kegan Paul, 1963.
- Trollope, Anthony. *The American Senator*. Oxford: Oxford UP, 1986.
- . *Castle Richmond*. Oxford: Oxford UP, 1992.
- . *Clergymen of the Church of England*. Leicester: Leicester UP, 1974.
- . *The Letters of Anthony Trollope*. Ed. N. John Hall. Vol. II, 1871–1882. Stanford, California: Stanford UP, 1983.
- . *North America*. Harmondsworth: Penguin, 1968.